

## 論文の和文要旨

論文題目

ペンシルベニア中南部英語における後舌低母音の合流：  
20世紀の通時的拡大に関する考察

氏名

木村公彦

本論文ではアメリカペンシルベニア州中南部における後舌低母音/a/-/ɔ:/の合流について、その歴史的变化をアメリカ方言辞書編纂に用いられた1960年代のインタビュー録音、および2019年に執筆者が行ったフィールド調査の録音を用いて検証した。

ペンシルベニア州中南部には歴史的にイングランドだけでなく、ドイツやスイス、スコットランド、ウェールズなど様々な言語・方言圏から移民がやってきた。その時代の人の流れに沿って当時の英語方言が変化しながら定着していったが、ペンシルベニア南部ではフィラデルフィアから渡来順にクェーカーやアーミッシュなど様々なコミュニティが存在しそれぞれに独自の言語・方言が発展していったこと、州を縦断するアパラチア山脈による地理的障壁があったため、東部と西部では異なる方言圏が築かれたことなど、複雑な背景を有している。また、1940年には東西を結ぶ道路網が完成したことで、東西の人の往来はそれ以前に比べると容易になった。

一方、前述の後舌低母音の合流現象については、20世紀初頭からペンシルベニア西部で言語地図等に記述が残っているが、それから約1世紀にも及ぶ長期にわたって、ペンシルベニア中南部への東漸はほとんど起こっていない。これに対する説明としてはLabov et al. (2006)のように、後舌低母音のうち、/ɔ:/の調音位置が高舌寄りに変化したことで、両母音の弁別が容易になったことを根拠とするものや、ペンシルベニア中南部のペンシルベニアドイツ語が基底として働いていることで両者の弁別が保たれているという、言語接触による説明、または州を縦断するアパラチア山脈の地理的障壁や道路交通量が比較的少ないことに依拠するものがある。しかし、Kimura (2018)の

ように、ペンシルベニア中南部の発音を音響分析した結果、若い世代で/ɔ:/の調音位置が低舌寄りに変化しており、/a/との合流を示唆する研究や、Anderson (2014)のように、ペンシルベニアドイツ語と英語のバイリンガルが1920年前後で減少し今や稀であることを述べた研究が存在する。また、地理的障壁や交通量に依拠する説に関しては、実際には東西を横断する道路の交通量は多いため、上記の説以外の説明が必要である。

以上のように、現時点において、ペンシルベニア中南部で合流の拡大が起きていないことを積極的に説明できる説はないと考えられる。そのため、本研究では特にペンシルベニアドイツ語の影響が小さくなり、かつ東西を結ぶ交通網が整備された1940年以降に生まれ育った話者の間では、合流に向かう母音の動きがあったと仮説を立て、それを検証した。

アメリカ英語母語話者を対象とする聴覚試験及び音響分析による過去の言語変化の発掘的調査により、実際に1940年以降に生まれた話者の間では両母音の差が聴覚的にも音響的にも減少していることが示された。聴覚印象も取り入れて判断すると、19世紀末には、後舌低母音の合流はピッツバーグ周辺の西部方言の特徴である円唇性を残した母音に向かって変化している傾向が確認された。以上のことから、合流は西のピッツバーグから伝播してきたものであると考えられる。

また、Labov (2001)でも指摘されているように、女性のほうが男性に比べて両母音の距離が近づいていることが判明した。最も若い年齢の女性は円唇性のない方向に向かう変化を示しているが、これがペンシルベニア中南部の独自の変化なのか、あるいはピッツバーグ以外の合流が伝播した結果なのか、今後追加調査を行い、更なる検証を行う必要がある。

アメリカ方言音声学の研究文脈上、本論文の成し得る貢献としては以下の2点が挙げられる。

1. 社会言語学的に複雑な背景を持ちながら、先行研究が少なかった地域を発掘的に研究することで、言語現象（後舌低母音の合流）のこれまで知られていなかった拡大様相を一部明らかにできた点
2. 聴覚実験構築のために用いたオンライン実験手法の導入と、従来の手法よりも正確な母音フォルマント測定を行うための測定手法の改良を行った点

最後に、各章の内容を簡潔にまとめる：

第1章では導入として、言語背景の簡潔な説明とともに、本研究の対象となるペンシルベニア中南部の英語方言を扱った動機を述べ、本博士論文の構成について記述した。

第2章ではアメリカ英語の方言区分が生じた初期の要因である、植民地時代の移民の流れについて特に詳しく扱った。最初にアメリカ英語全体の形成に関して、過去のアメリカ方言学や方言地図プロジェクトの成果に触れながら概観した。その後、本研究の対象であるペンシルベニア州に焦点をあて、その内部での移民の流れの歴史を説明した。

第3章は本論文で用いた音素表記に関する取り決めと、ペンシルベニア中南部における合流に関して、歴史的に西部から東部への拡大があまり起こっていないことを中心に先行研究をまとめ、前述の仮説を提示した。

第4章から第6章にかけては本研究で行った実験・分析に関する記述を行った。第4章では手法に関する詳細な説明を行い、特に使用した音声データ、オンライン聴覚試験、音声データの音響分析手法について詳細な説明を行った。特にオンライン聴覚試験と音響分析手法に関しては、従来の手法では対応できなかった問題に対する解決策を含んでおり、音声学の研究手法の発展に寄与できると考えられる。

第5章ではオンライン聴覚試験の結果を集計・分析し、その結果にみられる傾向についてまとめた。行った実験のうち、AX弁別試験で同一刺激音の比較 ( $A=X$ ) をした場合は各音素カテゴリー内でのばらつきの度合いを表す結果が得られたこと、異なる刺激音の比較 ( $A \neq X$ ) の場合は両母音の聴覚的距離を示す結果が得られたことが示唆された。同定試験からは、実験参加者の後舌低母音が母音空間のどちらにずれているのかを示唆する結果が得られた。

第6章では第5章の聴覚試験結果の音響的な説明を試み、それとともに後舌低母音の弁別に影響を及ぼしうる音響的パラメータが何か検討を行った。検討の結果、F1、F2、母音の持続時間のすべてが後舌低母音の弁別に関連することが判明した。また、この検討により明らかになった後舌低母音の聴覚判断に影響のある音響パラメータに着目し、音響分析の対象を1960年代および2019年の全データに含まれる後舌低母音に拡大し、実行した。1960年代のデータについては当時の共時的な地理的分布を再建した結果、1940年のデータを用いたWetmore (1959)と1988年のデータを使用したHerold (1990)の2研究の空白を埋める形で、本研究における初期状態を確認した。

次にこの初期状態から2019年に至るまで、SCPEにおける後舌母音の音色がどのような時間変化を辿ってきたのか、2019年のフィールド録音を用いた通時的比較で検証した。この検証においても上記の地理的分布の検証と同一の音響パラメータを比較

し、若い世代ほど両母音が音響的にも近づいていること、また女性のほうが男性に比べて接近の度合いが大きいことが示された。

第7章では全体の結論を再度述べ、残った課題を箇条書きの形でまとめた。